

「無分別」のすすめ

先端科学研究所
吉田徹彦

20世紀初頭の著名な数学者ポアンカレの著書『科学と方法』には、フックス関数の論文を完成させていたころの経過を解説する一文があります。それによれば、論文の作成に関わった最初のころは、なかなか証明が進まなかったと述べています。それが、ミルク抜きのコーヒーばかりを飲む2週間ほどがたって、ある晩、超幾何級数から誘導されるフックス関数の一部類の存在を証明すればいいという「最初のひらめき」を得て、テータフックス級数というものを創造したことが語られています。その後の証明展開の段階で訪れた「第二のひらめき」は、旅行中にある街で乗合馬車のステップに足を乗せた瞬間だったと述べています。「第三のひらめき」は、別な数学テーマの研究中、海岸の断崖の上を散歩しているときに突然得られたと述べています。そして、数学的困難を解決することになる「第四のひらめき」は、数学的研究を離れて兵役に服していたある日、大通りを横断していたときに困難を突破する解法が浮かんできたことが語られています。ポアンカレは、「突如として啓示を受けることはある。しかしそれは無意識下で思索的研究がずっと継続していたことを示しているのだ」と述べるとともに、それを「数学的発見における精神活動の関与」と定義しています。

ポアンカレは、「ひらめき」を作り出すのは意識された言語論理でなく、絶え間ない能動的な思索、及び実践を伴う感受性であると主張していると考えられます。言い換えれば、自らが創出した数学的論理、科学的論理の世界では説明がつかない「精神活動」、「こころ」の世界で作り出されていることを言明しているともいえます。

私が『科学と方法』で感銘を受けたポアンカレのエピソードは、『「無分別」のすすめ』においても紹介されています。ホンダの三代目社長であった久米是志氏の著書です。久米氏は、「創出をみちびく知恵」を副題とした『「無分別」のすすめ』のなかで、「ひらめき」を、我を忘れて研究対象に没頭したあとで「対象と自分が不可分」の状態となること、即ち「自他非分離」状態になることを、「無分別」（むふんべつ）として捉え、「無分別」智としての論を展開しています。「無分別」智に関し、久米氏は、「ホンダの人間より、俺の言うことを吉田さんのほうが素直に分かってくれる」と冗談まじりに笑いながら仰っていたことが昨日のこのように思い出されます。

研究開発として、答えのある論理や合理性ばかりを追求するのではなく、無我夢中になって果敢に本質的な課題に取り組み続けることが創造性、創出性の泉源であり、「異端から先導へ」に繋がるものだと考えます。東亜合成は、新しい科学的発見をベースに、人類にとっての「新素材」創出を強力に推進していきます。